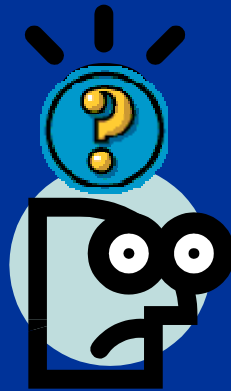


つくば市の学区は どうなっているか？



村山祐司・葛城友香

目次

- ねらい
- つくば市について(位置・地形)
- つくば市について(交通)
- つくば市について(歴史)
- つくば市の小学校について(創立年)
- つくば市の小学校について(児童数推移)
- つくば市の小学校について(児童数)
- 直線距離に基づく学区
- 道路距離に基づく学区
- 道路距離と各学校の受入可能児童数を考慮した学区
- 小学校学区のこれから



ねらい

- つくば市の小学校学区の現状と課題を考える。
具体的には、
 - ✓ 直線距離に基づく最寄りの小学校
 - ✓ 道路距離に基づく最寄りの小学校
 - ✓ 各学校の受入可能児童数を考慮した道路距離に基づく最寄りの小学校などの探索を通して、
児童にとっての最適な学区を提案する。

つくば市について(位置・地形)

- つくば市は、茨城県の南西部に位置し、県庁所在地水戸市から南西に約50km、東京から北東に約50kmに位置している。また、南北に30.4km、東西に14.9kmと南北に長い形状をしており、面積は284.07km²で、県内で4番目の広さである。
- 北に筑波山、東に霞ヶ浦があり、これらは水郷筑波国定公園に指定されているなど自然環境に恵まれている。

また、筑波・稲敷台地と呼ばれる標高20～30mの関東ローム層におおわれた平坦な地形であり南北に流れる小貝川、桜川、東・西谷田川などの河川は、周辺の平地林、畑地あるいは水田等と一体となって落ち着いた田園風景を形成する。

つくば市について(交通)

- 市内には、国道125号・354号・408号のほか、南部に常磐自動車道が走っており、谷田部・桜土浦の2つのインターチェンジがある。また、21世紀初頭の開通を目指して、都心から40～60km圏を環状に結ぶ首都圏中央連絡自動車道の建設が進められている。
2005年にはつくばエクスプレスが開通し4つの駅(つくば、研究学園、万博記念公園、みどりの)がある。
- 市の中心地区には、つくばセンター交通広場が設置され、路線バス、高速バス、市内循環バスなどの拠点となっている。



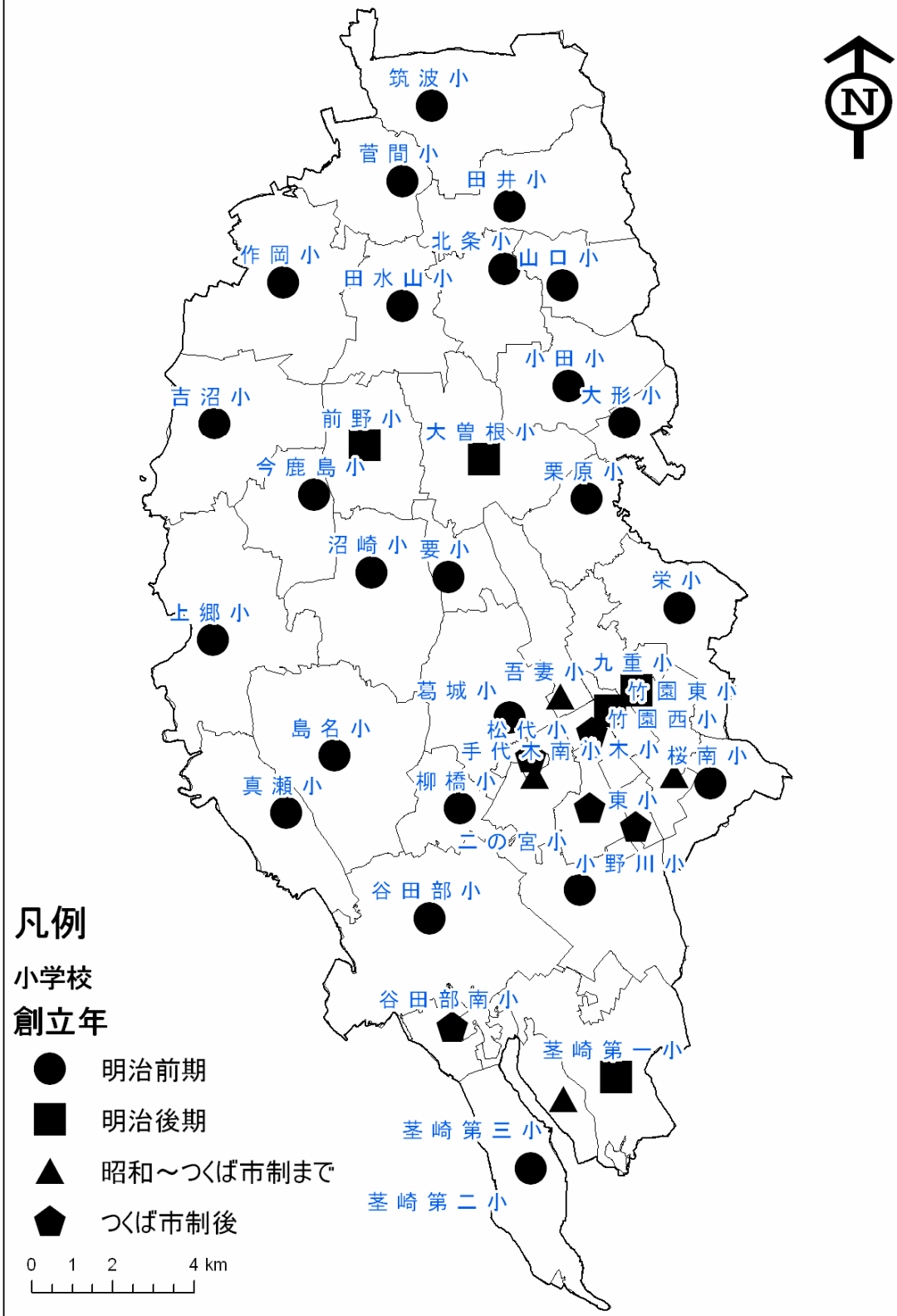
つくば市について(歴史)

	筑波郡大穂町	筑波郡豊里町	筑波郡谷田部町	新治郡桜村	筑波郡筑波町	稲敷郡茎崎町
1889						市制町村制の実施によって、それまでの小茎・高崎・上岩崎など11カ村を統合し、茎崎村となる
1953	町制を施行 栗原村蓮沼を編入					
1955	旭村要を編入	旭村・上郷町の廃置分合で上郷町になり、豊里町と改名	谷田部町・真瀬村（一部を除く）・島名村・小野川村・葛城村の1町4村が合併して誕生	栄村・九重村・栗原村が合併して誕生	筑波町・田井村・北条町・田水山村・小田村が合併して誕生	
1956	吉沼村と合併	吉沼村の一部を編入			作岡村編入	
					菅間村編入	
1985	研究学園都市の概成を記念し、「人間・居住・環境と科学技術」をテーマに、EXPO'85国際科学技術博覧会が開催され、周辺地区を含めて国際科学技術都市「サイエンスシティつくば」として名が広まった。そのような背景のもと、地元町村でも合併の機運が盛り上がり、「つくば」としての一体的な開発を目指した					
1987	筑波研究学園都市を形成する6町村のうち、大穂町・豊里町・谷田部町・桜村の3町1村が合併し、県内の自治体では20番目、全国では655番目の新市「つくば市」が誕生					町制を施行
1988	筑波町が加わる					
2002	茎崎町が加わる					

- 現在のつくば市を形成する旧6町村は、旧茎崎町を除いて町村合併促進法により昭和30年前後に誕生した。(表)
- 現在、つくばエクスプレスに伴う沿線開発および首都圏中央自動車道の建設など、新たな都市基盤の整備が進められている。

つくば市の小学校について (創立年)

- つくば市では、明治5年(1872)にはじめて小学校が設置され、それ以降増え続け、平成7年(1995)には38校となった。
- 1)明治前期(明治5～17年)、2)明治後期(明治18年から明治の終わりまで)、3)昭和からつくば市制(1987年)まで、4)つくば市制後の4つに分類した。右図を見ると、
 - ✓ 明治時代に多くの小学校が創立されていること
 - ✓ 市中心部より東側の小学校密集地域においては、新しい小学校が多いこと
 - ✓ 当初から小学校の分布がつくば市全体に広がっていたことがわかる。



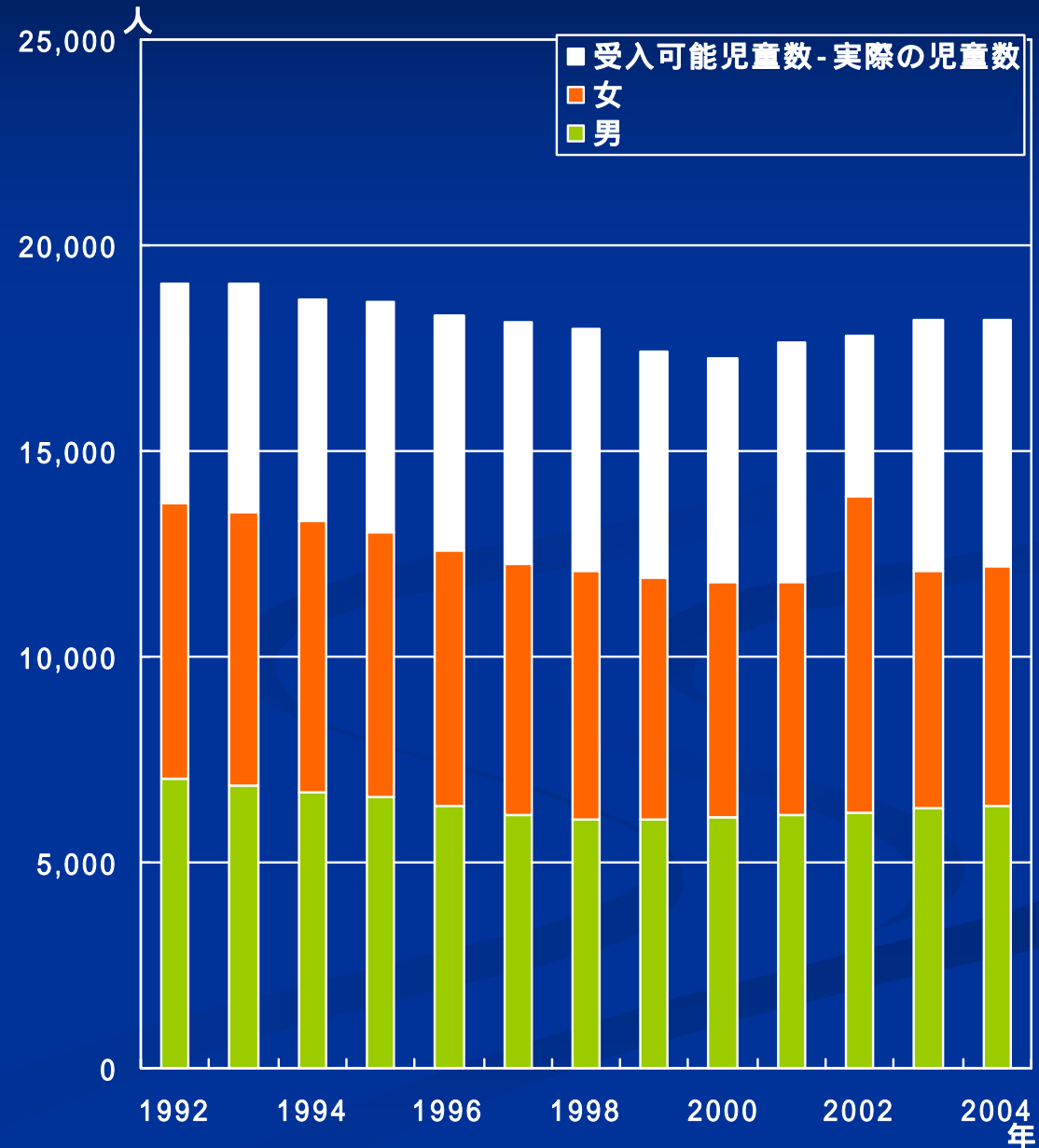
つくば市の小学校について(児童数の推移)

- 児童数の推移を右図に示す。

2000年前後に児童数が減っているが、全体的には安定している。

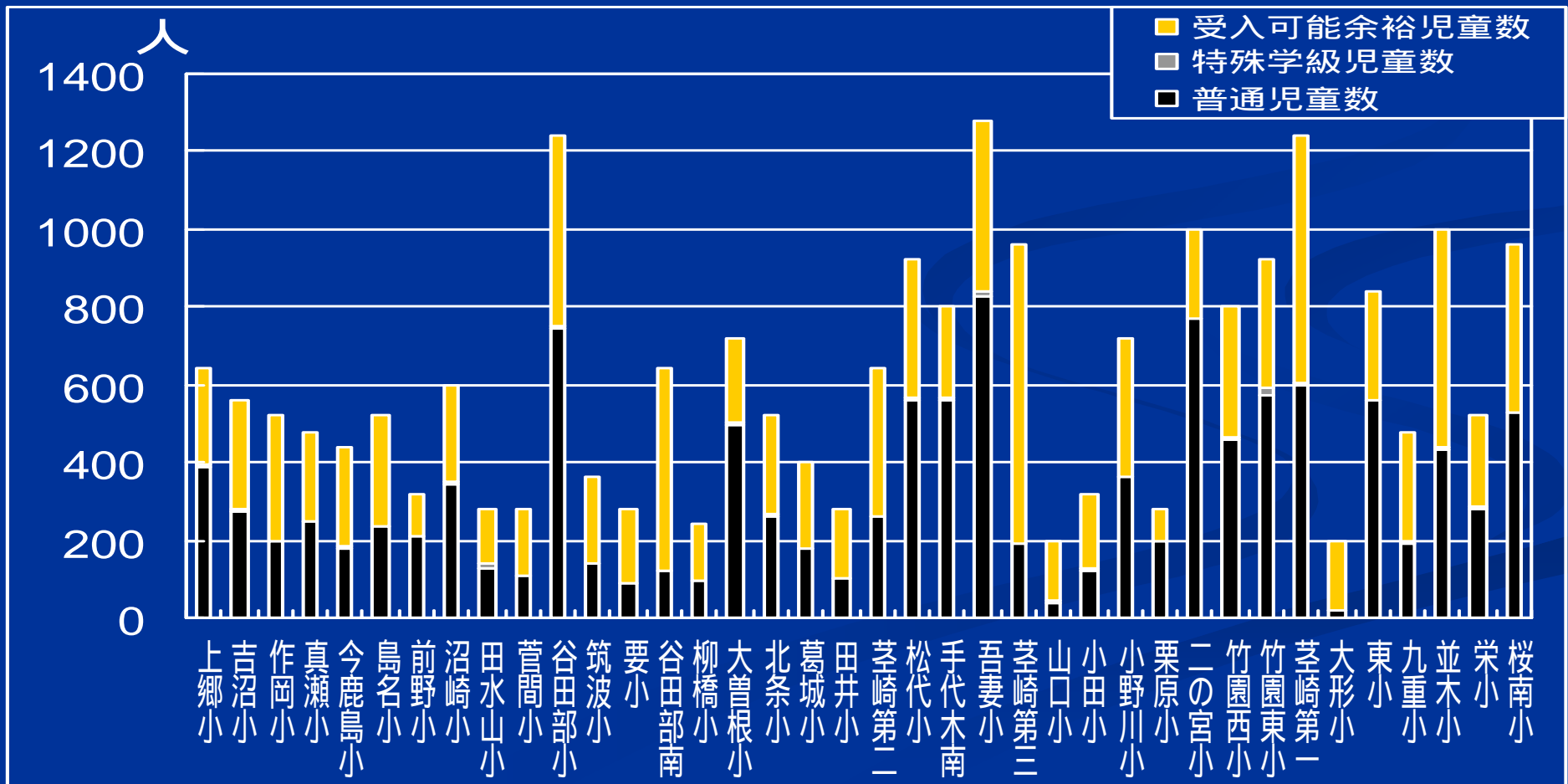
しかし、長期減少傾向にある学校や、児童数が増加し続けている学校があり、小学校間で格差が現れている。

- 受入可能児童数・・・
各小学校の教室数 × 40人



つくば市の小学校について(児童数)

- 2005年における各小学校の児童数を示した。全ての小学校において、児童を受け入れる余裕が十分にあり、これからの市の発展に対し、全体的に耐えうるものである。発展途上の今だからこそ、人口分布や児童の利便性を考えた学区を定める必要がある。



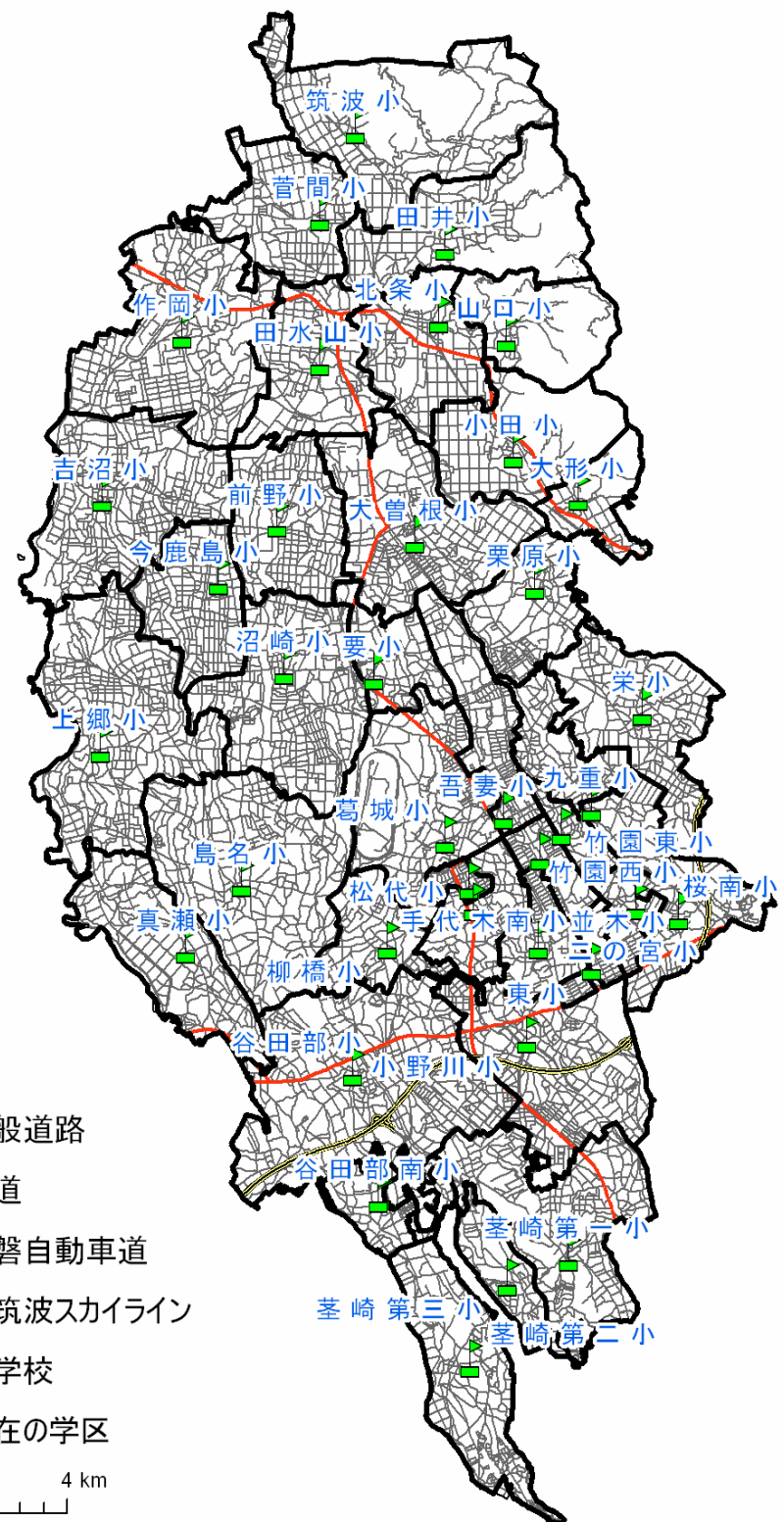
つくば市の小学校 について(現在の学区)

- 右図は現在の小学校の学区である。
- 市の東で小学校が密集しており、学区が長細くなっている。
- 茎崎町との合併以後は、学区の変更が行われていない。

凡例

- 一般道路
- 国道
- 常磐自動車道
- 表筑波スカイライン
- 🚩 小学校
- 📦 現在の学区

0 1 2 4 km



直線距離に基づく学区

- 右図は直線距離に基づいた、最も近い小学校に通学する学区を、ボロノイ分割によって理論的に設定したものである。
- 直線距離に基づいているため、実際の通学路に基づく、別の小学校に割り振られる可能性がある。

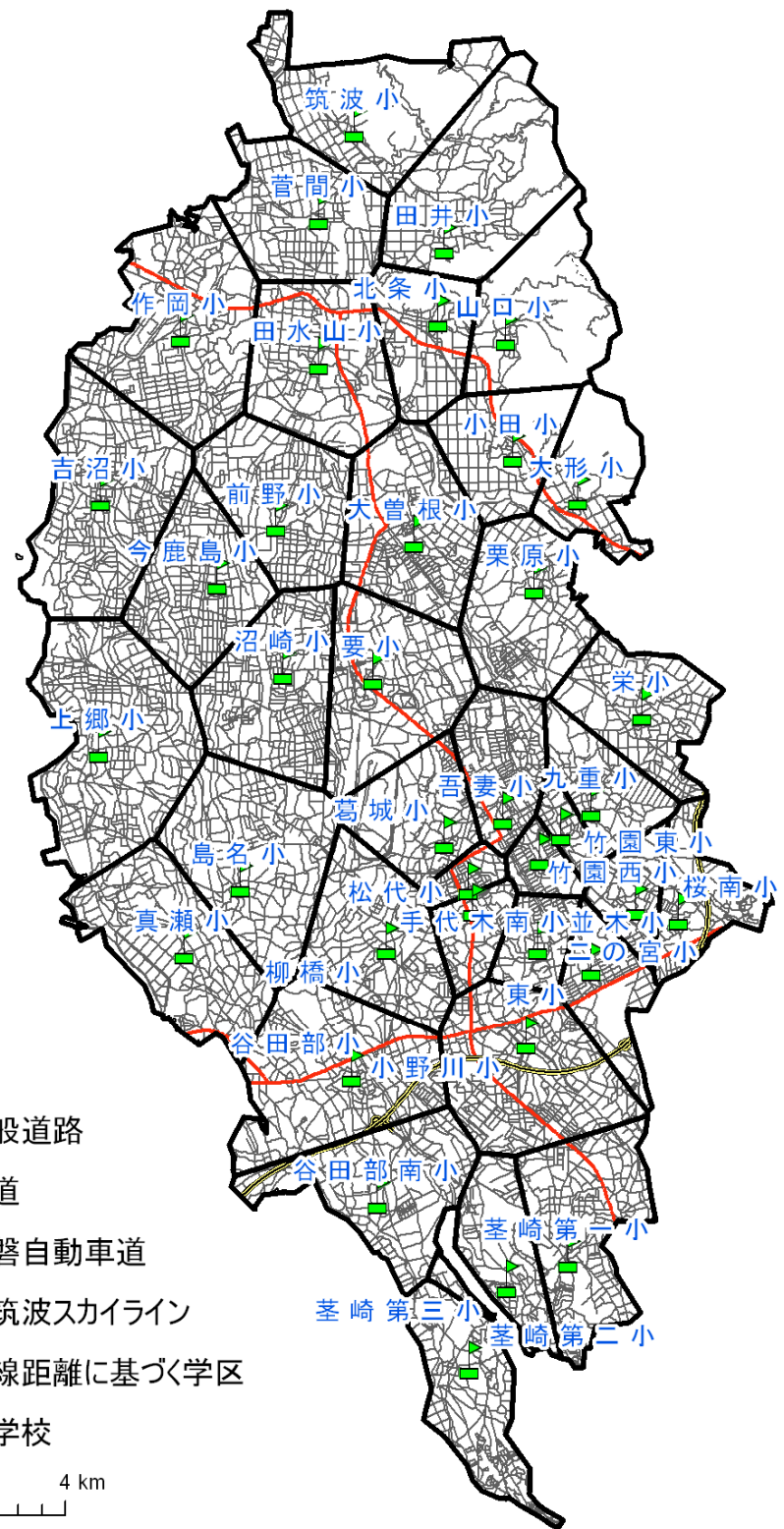
凡例

道路

- 一般道路
- 国道
- 常磐自動車道
- 表筑波スカイライン
- 直線距離に基づく学区

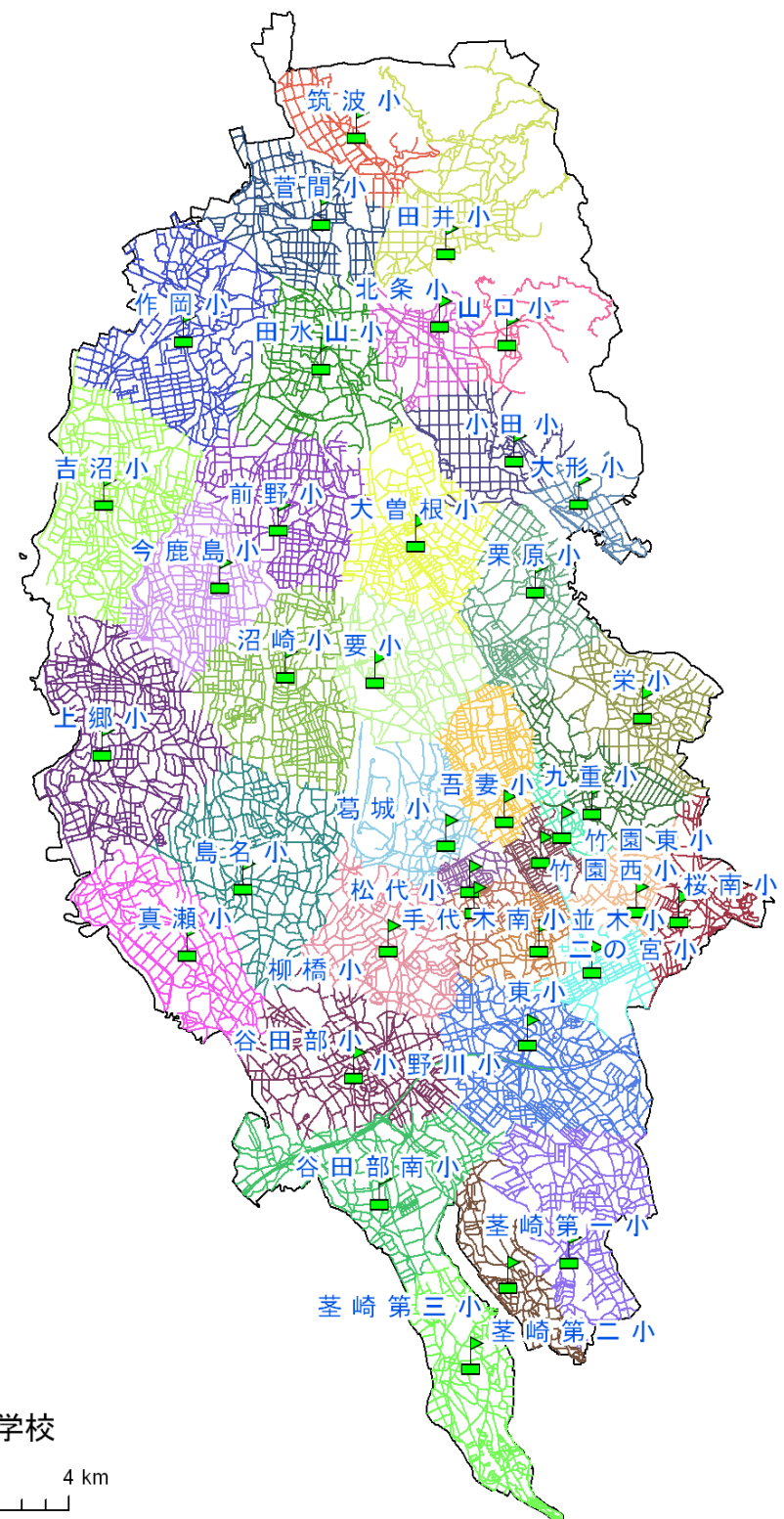
- 小学校

0 1 2 4 km



道路距離に基づく学区

- 右図は道路距離に基づき、最近隣小学校に通学する学区を設定したものである。
- 理論的に、児童は一番距離の近い小学校に通うことになる。
- しかし、将来的に、街の発展によっては児童が一部の小学校に偏ってしまうかもしれない・・・



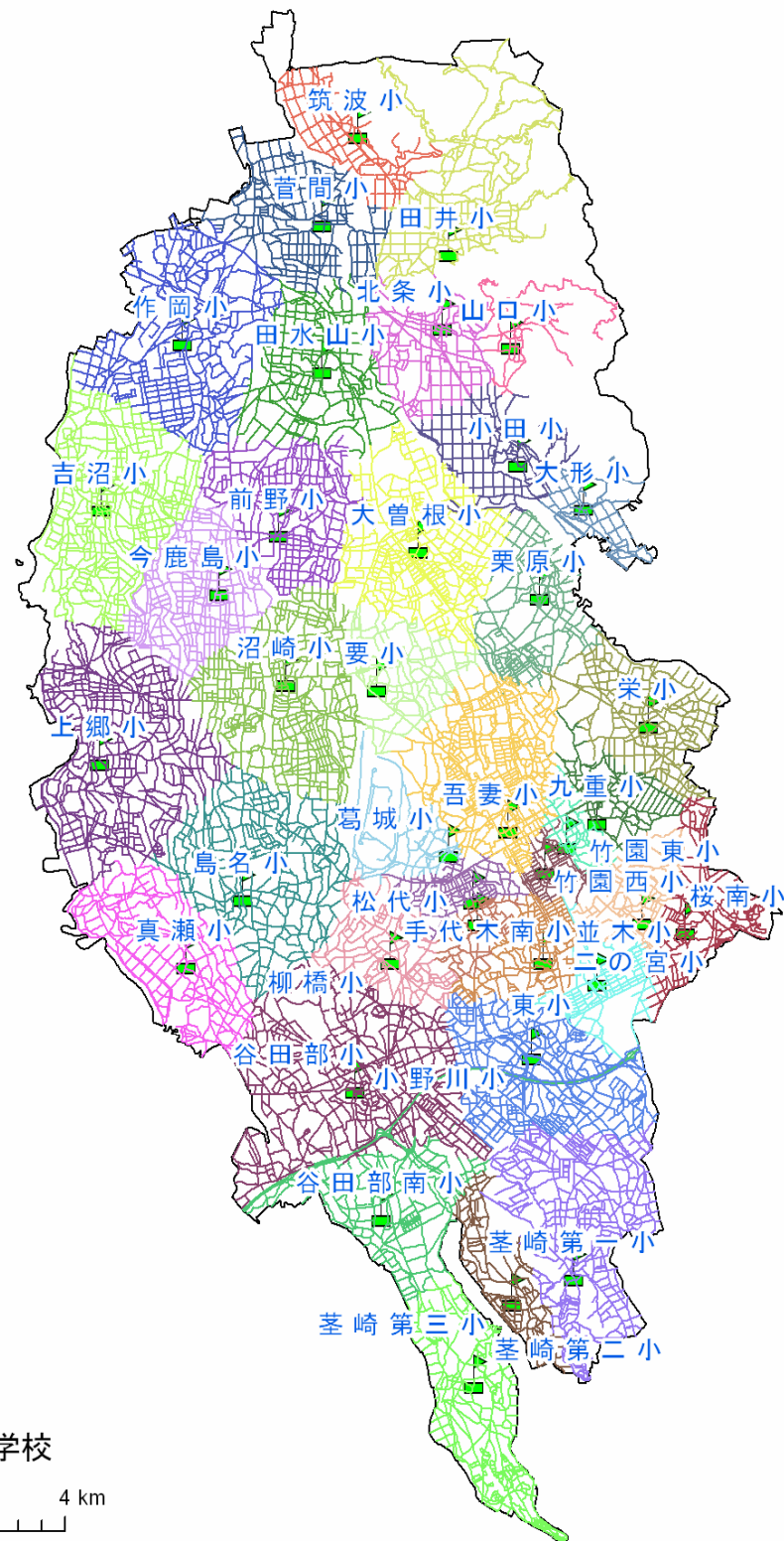
凡例

小学校

0 1 2 4 km

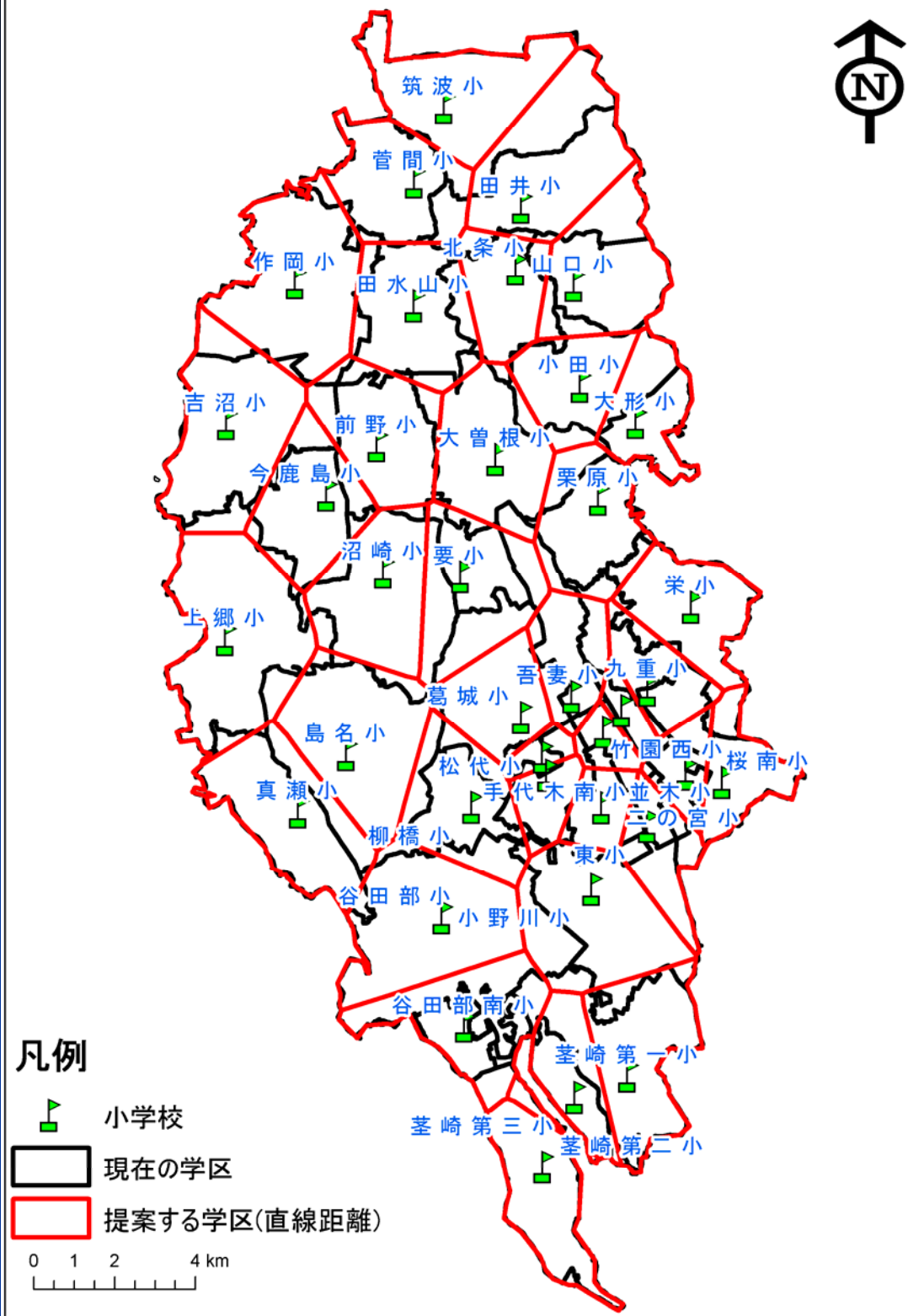
道路距離と受入可能児童数を考慮した学区

- 各小学校の受入可能児童数を考慮した学区を右図に示した。
- 道路距離にもとづく学区と類似したパターンであるが、特に吾妻小、大曽根小、二の宮小などが大きな学区を形成する。



現在の学区の比較 (直線距離)




- 要小の学区の拡大
- 吾妻小の細長い学区の解消
- 谷田部南小の学区の拡大




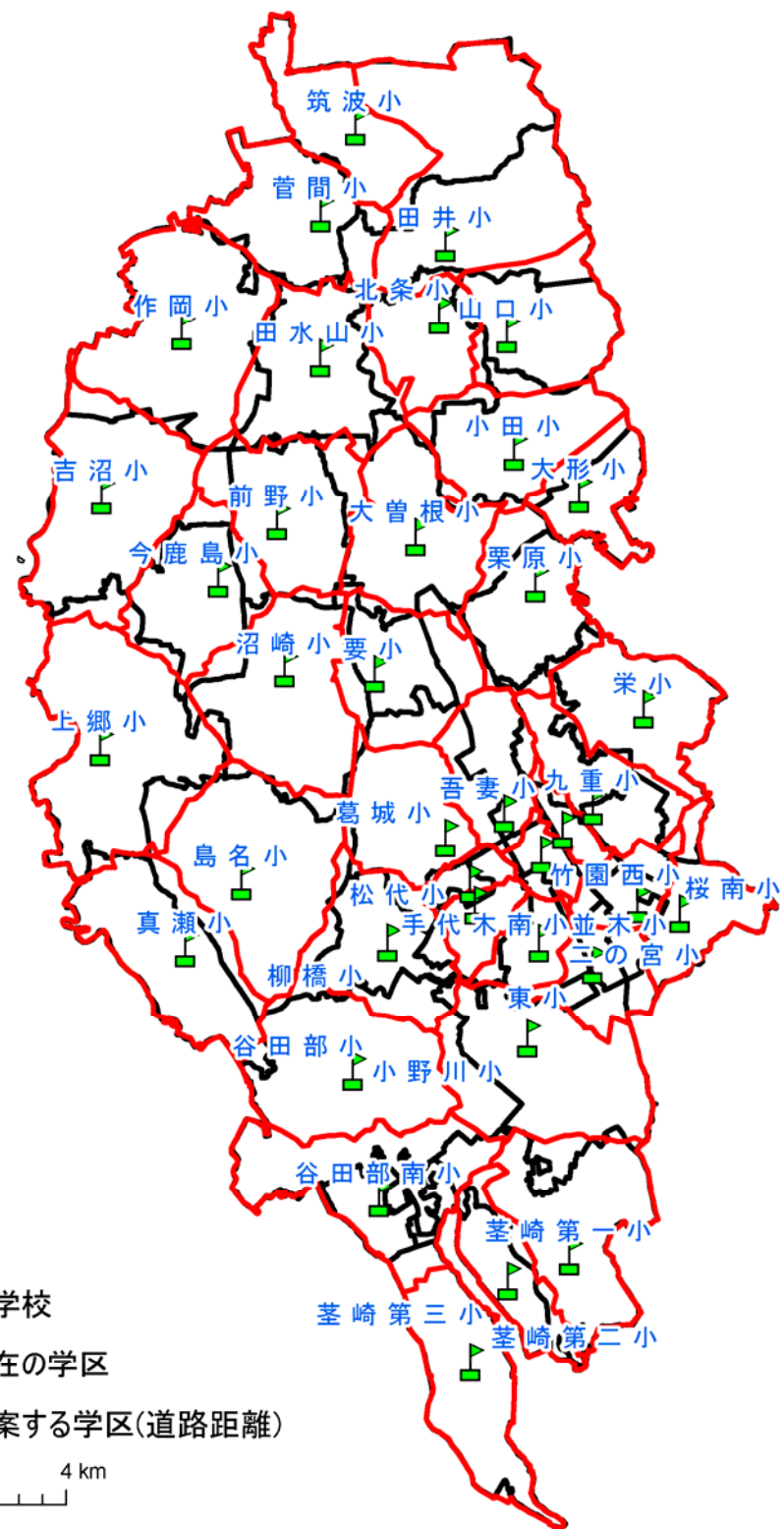
現在の学区の 比較 (道路距離)

- 筑波小の学区の縮小
- それに伴う田井小の学区の拡大
- 吾妻小の長細い学区の解消
- 谷田部南小の学区の拡大

凡例

-  小学校
-  現在の学区
-  提案する学区(道路距離)




0 1 2 4 km





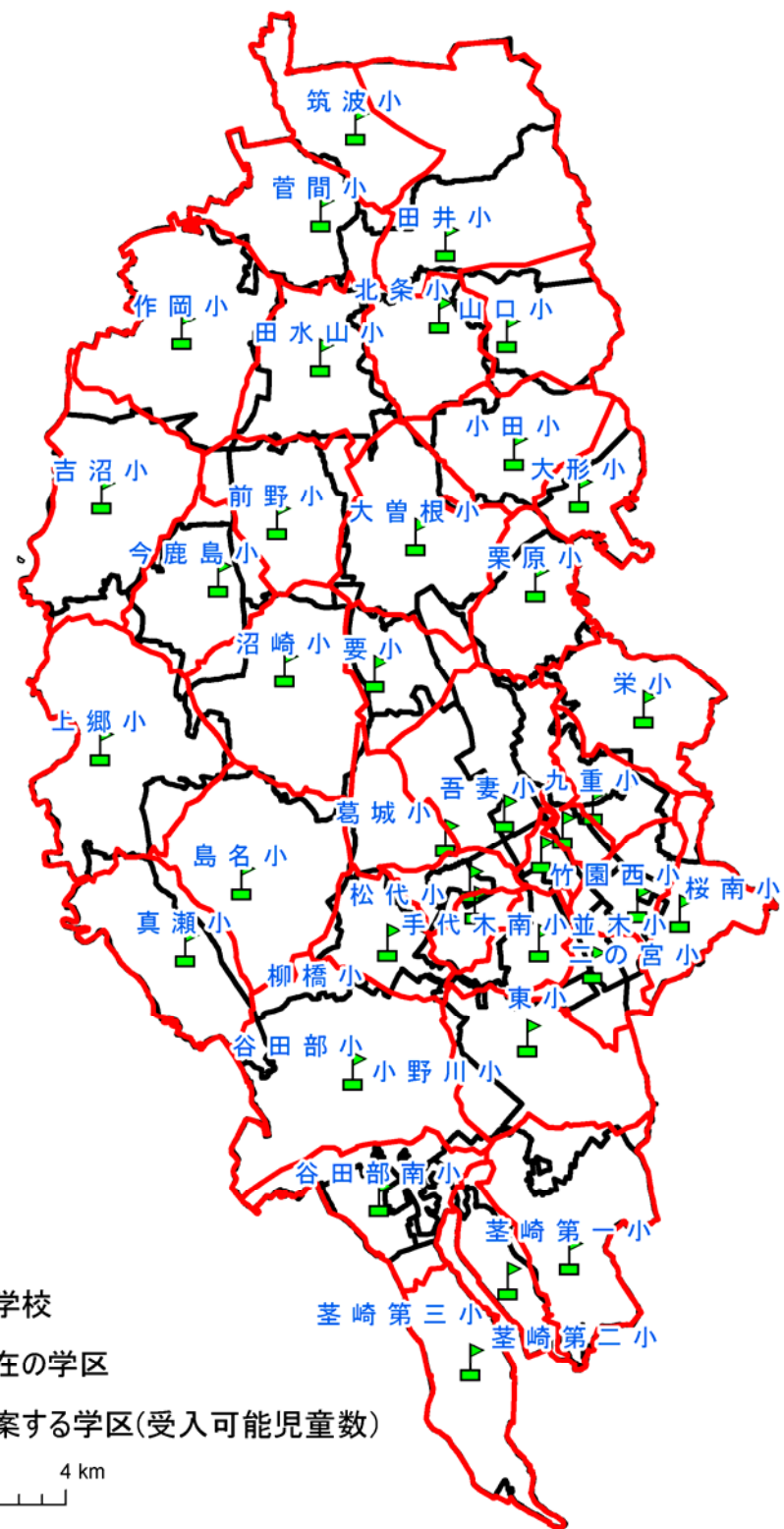
現在の学区の 比較 (児童数)

- 吾妻小の学区の拡大
- それに伴う葛城小の縮小
- 前2つの学区に対し、要小の学区の縮小(現在の学区に近い)

凡例

-  小学校
-  現在の学区
-  提案する学区(受入可能児童数)

0 1 2 4 km




つくば市小学校学区の これからの課題

- 人口の多い地域の小学校では、
 - 児童の数が急増しており、「受入可能児童数」が飽和状態になりつつある。
- 人口分布の空間的変動を予測し、適切な学区設定を行うとともに、規模(受入可能児童数)の適正化を図る必要がある。

